様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ７ 月　 ３ 日現在

機関番号：３２６９０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４７１１

研究課題名（和文）国語科文学教育における小中高を通して獲得するべき技能とコンピテンシーの研究

研究課題名（英文）Research on skills and competencies to be acquired through elementary, junior high and high school in Japanese language literature education

研究代表者
山中　正樹（YAMANAKA, Masaki）

創価大学・文学部・教授

研究者番号：２０２８０００００

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、国語科教育における文学教材を使った授業において、21世紀を生き抜く学習者がどのような技能とコンピテンシーを身に付けるべきか考究し、そのモデルを策定するために、文学教育研究と近代文学研究の達成水準を明らかにし、そこから文学教育の内容を提起した。
　その成果は、全国大学国語教育学会や日本文学協会国語教育部会等で発表し、論文等で公開した。特に、高等学校の６つの主要教材について、〈作品論〉〈教材研究〉〈授業構想〉の3本立ての形式で論じた書籍、『21世紀を生きる読者を育てる　第三項理論が拓く　文学研究／文学教育　高等学校』（田中実ほか編、明治図書出版）にまとめ、2018年10月に公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　国語科教育における文学教育では、①学習者の自由な解釈とテストの「正解」に到達させようとする「正解到達主義」の矛盾、②獲得するべきコンピテンシーの検討が不十分、③文学教育における技能の不明確さとその技能の汎用性の低さ、等の課題が存在した。
　本研究では、新学習指導要領における「国語科」の「目標」にある「言葉による見方・考え方を働かせ」ること、およびその具体的内容である「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」（文部科学省『解説』）を達成するための方途としての、文学作品の考察と〈授業構想プラン〉を提出することが出来た。

研究成果の概要（英文）：This study was conducted in order to investigate what skills and competencies students who will survive in the 21st century should acquire in lessons using literary teaching materials in Japanese language education, and to formulate a model for it. The level of achievement of modern literature research was clarified, and the content of literary education was proposed from there.
　The results were announced at the Japanese Teaching Society of Japan and the Japanese Literary Association's National Language Education Subcommittee, and published in papers and other articles. In particular, a book that discusses the six main high school teaching materials in the form of three pieces, <work theory> <teaching material study> <class concept>, "literary research developed by the third theory that fosters readers living in the 21st century / Literature Education High School" (Tanaka Minoru et al., edited by Meiji Tosho Publishing) was published in October 2018.

研究分野：近代日本文学・国語教育学

キーワード：文学研究　文学教育　国語科教育　近代小説　第三項論　「新しい作品論」　〈読み〉の原理論　世界観認識＝世界存在の認識

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）日本の教育の動向

平成 29・30 年度改定学習指導要領に向けて開かれた「育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会」では、「教科を超える資質・能力」、通教科的な「汎用的なスキル等」や「メタ認知（自己調整や内省、批判的思考等）」等の設定が示された。国語科においても、小中高の学習者が文学教材で、どのようなコンピテンシーを培えばよいかを、小中高 12 年間のスパンで考え直していく必要があった。

一方文学作品を特有の教育的機能を持った教材（媒材）としてみた時、その機能に沿った資質能力や目標・内容、技能の設定をしていく必要もあった。しかし本研究開始当初は、以下に示すような課題が存在した。

（２）日本における文学教育実践の課題

①「ナンデモアリ」と「正解到達主義」の矛盾

現在の小中高の文学教育では、学習者に自由な解釈を「初発の感想」として求めながら、最終的には、テストの「正解」に到達させようとする授業が多いという状況である。そのため、自由な読書では、教師や学習者に「文学作品はどのように読んでもいい」という「ナンデモアリ」の信念を持たせる一方で、テストにはただ一つ（有限）の「正解」があるという信念も持たせるという、矛盾した心理が生じていた。

②「登場人物の心情の読み取り」に固執し、獲得するべきコンピテンシーの検討が不十分

小中高で扱われる文学作品は、「おはなし」から「物語」「小説」へとジャンルが変化し、構造を異にしているにもかかわらず、また、発達段階も大きく異なるにもかかわらず、小中高の教育現場では、圧倒的に「登場人物の心情の読み取り」が行われており、文学教材で身につけるべき、小中高それぞれのコンピテンシーの検討が不十分であった。

③文学教育における技能の不明確さとその技能の汎用性の低さ

小中高の実践においては、《このような言語の技能を使えば、「登場人物の心情の読み取り」が行える》という授業がなされていなかった。一方で、明確な「言語技術」を教えることを標榜した授業実践（「言語技術教育」）では、近代文学研究の成果をふまえることのないまま、それぞれの実践者が独自に技能を策定しており、それらの「言語技術」が、どのような資質能力の形成やメタ認知形成につながるのかが明確ではないという問題が生じていた。

（３）日本における近代文学研究および文学教育研究の課題

①「主題」「作品」中心の潮流（「潮流１」）

戦後、日本における近代日本文学研究の主流は〈作家論〉であり、文学教育においても「作家の意図」に収斂する実践が主流であった。しかし 1960 年代後半以降、「主題」と「作家の意図」を分ける〈作品論〉に文学教育も移行し、精読すれば「作品」の中の正解（「主題」）にたどり着けるという（２）①で述べた「正解到達主義」の授業が生まれた（「潮流１」）。この授業は、テストと親和性が強いため、入試に迫られた中等教育において、今も強く引き継がれている。また、全国学力学習状況調査や地域の学力調査の点数に影響を強く受けるようになった小学校においても、この潮流が強くなってきているという状況であった。また、この潮流は、（２）③で述べた「言語技術教育」を推し進めることになったが、「言語技術」がコンピテンシー育成にどのようにつながるのかの議論もなく、「言語技術」そのものの習得が自己目的化されているという状況であった。

②「読者」「学習者」中心の潮流（「潮流２」）

1980 年代に入り、R.バルトなどのポストモダン思想が我が国にも上陸し、「作品」に代わって

〈テクスト〉という流動的な概念が導入された。それは、読者が変われば無限に「作品」の解釈も変わる、というものである。これにより、日本の文学研究には、（２）①で述べた「ナンデモアリ」の潮流（「潮流２」）が生まれた。文学教育もこの「潮流２」の影響を受け、「読者論」的な授業が台頭した。「読者論」的な授業とは、学習者の解釈を重視する授業のことである。その結果、特に小学校において、自分の好きな場面を発表したり、作品の魅力を話しあったりするような「読書会」的な授業が増加した。さらに、学習者中心の授業が叫ばれるようになった近年は、特にこの潮流２の授業が、小学校だけではなく中学校においても行われるようになった。

③「潮流１」と「潮流２」の矛盾の発生と継続

「潮流１」と「潮流２」とは、（２）①で述べた「ナンデモアリ」と「正解到達主義」の矛盾を、文学教育にもたらすことになった。その結果、ふだんの授業は「潮流１」の授業を行いつつ公開研究会では「潮流２」を行なうような、「本音と建前」の使い分けのようなことが起きたり、単元の最初は「潮流２」のように学習者の自由な解釈を重視するようしておきながら、単元の最後には教師が設定する正解に向かわせる（「潮流１」）実践が行われたりするようになった。このような狭間で、教師は苦悩し、学習者は戸惑いながら実践が行われている現状がみられた。

④矛盾を乗り越えるための方途

③で述べた矛盾を乗り越えるためには、文学教材の解釈の結果（「主題」や「人物の心情」）に正解を求める授業から脱皮し、文学教材の解釈は自由だとしても、どのような技能を使えばどのような解釈結果が得られるかということ自体を知ること、つまり、文学教材を読んでいくための技能を習得し活用させて、さまざまな解釈結果が得られることを学び、そのような学習を通して、２１世紀を生き抜くためのコンピテンシーを、文学教材を様々に読むことから得るという方向性で、文学教育を再構築しなければならない。

しかしながら、本研究開始当初は、活用するべき技能も定まってはおらず（（２）の③）、目指すべきコンピテンシーの検討も不十分な中では（（２）の②）、この矛盾を乗り越えることは困難と言わざるをえない状況であった。

２．研究の目的

本研究は、小中高 12 年間を見通した、国語科文学教育において、獲得するべき技能とコンピテンシーは何かを究明するものである。小中高の文学教材を使った授業において、21 世紀を生き抜く学習者がどのような技能とコンピテンシー（合わせて教育内容）を身に付ければいいか、それを理論的・実証的に、また、小中高の現場の教員や学習者と協働して、策定することを目的とする。

そのために、A：国内外の文学教育研究、および、B：近代文学研究、それぞれの達成水準を明らかに、C：達成水準に基づく小中高 12 年間の文学教育の教育内容の仮説を策定し、D：本研究の担当者と小中高の現場教員や学習者とが協働して仮説を検討・改善を図ることを目指すものである。

３．研究の方法

上記のように本研究は、小中高 12 年間を見通した、国語科文学教育において、獲得するべき技能とコンピテンシーは何かを究明するものである。それらを理論的に、また、小中高の現場の教員や学習者と協働して、策定することを目指すものである。

そこで本研究では、国内外の文学研究、文学教育研究の達成水準を確認した上で、文学教材で身につけるべき技能とコンピテンシーの仮説を立て、それらを、小中高の現場教員や学習者と協働で開催する研究会等で検証し、確定することとした。

そのために、平成 28 年度は、日本および諸外国における、研究上および実践上の、文学教育・近代文学研究の達成水準を確認する。それをうけて、小中高における、獲得するべき技能とコン

ピテンシーの仮説を策定する。平成 29 年度以降は、日本文学協会国語教育部会を中心とした、小中高の現場教員と協働で開催する研究会など、開かれた場で仮説を検討し、技能とコンピテンシーを確定するものとした。

平成 30 年度は、引き続き現場教員との研究会を連続的に開催し、上記技能とコンピテンシーの内容等の改善を図った。こうした文学教育の技能やコンピテンシーについての研究成果を、全国大学国語教育学会・日本文学協会等で発表を行うとともに、それらの機関誌等に研究成果を発表したり、現場教員との研究会によって成果報告会を開催する。

なお、研究計画に掲載した、海外での「文学教育・近代文学研究の達成水準を確認」する作業にさらに取り組みたいということもあり、研究機関を 1 年間延長し、これにあたった。

４．研究成果

研究第 1 年目の平成 28 年度は、上記目的の遂行のために、高等学校国語科における文学教材を中心に研究を行った。具体的には、高等学校国語科の現代文分野において、各教科書に収録されている主要な小説教材である「羅生門」（芥川龍之介）・「山月記」（中島敦）・「鏡」（村上春樹）・「神様」「神様 2011」（川上弘美）・「舞姫」（森鴎外）・「こころ」（夏目漱石）を採り上げ、研究を進めた。

この間、2016 年 12 月に中央教育審議会が答申で、高等学校国語科に「文学国語」なる科目を設置することを求めた。そこで本研究でも、想定される新教科「文学国語」の教育内容を射程に入れ、「文学教材」の持つ「資質・能力」について検討し、「文学」が持つ「力」が読者にもたらす効能等を考え、教育内容を策定するための研究を行った。

そのために、上記作品群が〈近代文学研究〉においてどのように読まれてきたのか。またそこにどのような問題が在ったのかを検討した上で、田中実が提唱する〈第三項理論〉の立場から、新たな作品の〈読み〉を検討した。さらにそれを基に、〈文学教育研究〉の立場から、「文学」ならではの「力」と「文学教材」ならではの「資質・能力」を養うための〈教材価値〉に関する研究を行い、それを元に、〈授業構想（プラン）〉の策定を目指した。

翌平成 29 年度は、前年度の研究を踏まえ、高等学校文学教材について、教育を行うための作品研究／教材研究／実践提案の作成を、引き続き上記 6 つの教材について行った。

これらの教材について、第三項理論と言われる文学理論を踏まえ、文学のみならず、ものの見方・考え方（世界観／世界認識）を育て、ポスト近代を生き抜き、さらに、ポストセンター試験時代における新しい教育改革に向けて、真の意味でのアクティブ・ラーニングを生み出す授業プランを示した。

作品研究については、田中実が提唱する第三項理論を元に、従来の作品研究を乗り越え、ポストポストモダンの地平を目指した研究を行い、作品の新たな解釈を提出した。教材研究／授業提案については、作品研究の成果を踏まえつつ、新しい学習指導要領が目指す方向に則り、さらに、文学による「深い学び」を目指した教材研究と授業提案を行った。

これらの成果を、全国大学国語教育学会において、共同研究発表を行った。そこでは、第三項理論が<総合的><教育的><哲学的><全方位的><協働史的>という特徴を持つものであり、文学教育における教育内容構築のために、つまり、「文学教材」ならでは の「資質・能力」を構築するための準備としての「文学教材」ならではの「力」を考えていくために、優位性を持つ理論であることを示した。

研究第三年度の平成 30 年度は、これまで継続して取り組んできた、高等学校国語科における文学教材の研究を仕上げ、それを公刊する事で、社会にその成果を問うことが出来た。具体的には、高等学校国語の小説教材のうち、所謂「定番教材」として長く、また多くの教科書に採録されている小説教材６作品（「こころ」「羅生門」「舞姫」「山月記」「神様２０１１」「鏡」）のそれぞれについて、〈作品論〉〈教材研究〉〈授業構想〉の 3 本立ての形式で論じた書籍、『21 世紀を生きる読者を育てる　第三項理論が拓く　文学研究／文学教育　高等学校』（田中実・須貝千里・難波博孝編、明治図書出版）を、2018 年 10 月に公刊することができた。

そこでは特に、2017 年 3 月（小学校・中学校）および、2018 年 3 月（高等学校）に告示された、新学習指導要領における「国語科」の「目標」として書き出されている「言葉による見方・考え方を働かせ」ること、およびその具体的内容である「対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」（文部科学省『解説』）を達成するための方途としての、文学作品の考察と、〈授業構想プラン〉を提出することが出来た。

前記研究目的遂行のため、国内においては、全国大学国語教育学会、および、日本文学協会国語教育部会の活動を中心としながら、その他の所謂、民間教育団体等において、研究発表や情報交換を行なった。特に、それぞれの機関誌「国語科教育」、日本文学」等に論文を発表し、年次大会や研究集会において研究発表・討議等を行なった。

また海外においても、本研究の〈文学研究水準確認プロジェクト〉および〈近代文学研究〉担当の、田中実・山中正樹を中心に、とくに中国の日本文学研究者・日本語教育研究者と連携しながら、〈第三項理論〉に基づいた「新しい作品論」による新たな文学研究の地平を探求すべく、それぞれが中国国内で、研究発表・講演、研究協議・情報交換等を行なうことができた。

研究期間を 1 年延長した最終の平成 31・令和元年度は、これまで継続して取り組んできた高等学校国語科における文学教材の研究成果をもとに、それぞれの研究分野と領域で、その実践と深化に取り組んだ。

田中実は、近代日本文学作品の〈読み〉の問題について、〈第三項理論〉の中国での展開と啓蒙に力を注いだ。山中正樹も、中国・香港を中心に、現地の大学教員の協力を得ながら、近代日本文学の受容の実態に関する調査を行った。

さらに、難波博孝・中村龍一・齋藤知也は、前年度までの研究成果を踏まえながら、文学教育の分野で、〈第三項論〉に基づく、国語科文学教材の教材価値と、その授業展開について、それぞれの研究と実践に取り組み、研究発表や論文を発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計21件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 中村龍一	４．巻 17
２．論文標題 読者を異界に連れ去っていく二つの物語	５．発行年 2019年
３．雑誌名 語り合う文学教育	６．最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中村龍一	４．巻 46
２．論文標題 「文学作品」が、なぜ「文学教材」になるのか―「〈読む〉ことの価値」は〈愛〉に向かう―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日文協　国語教育	６．最初と最後の頁 79-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山中正樹	４．巻 30
２．論文標題 村上春樹の文学世界〈一〉――「地下二階」の意味をめぐって――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 創価大学日本語日本文学	６．最初と最後の頁 1-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 田中実	４．巻 67(8)
２．論文標題 〈近代小説〉の神髄は不条理、概念としての〈第三項〉がこれを拓く　―鴎外初期三部作を例にして―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本文学	６．最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中実	4．巻 25
2．論文標題 論考　石田少佐の微笑み―『鶏』を読む人のために―	5．発行年 2018年
3．雑誌名 文京区立森鴎外記念館NEWS	6．最初と最後の頁 6-6
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村龍一	4．巻 17
2．論文標題 読者を異界に連れ去っていく二つの物語	5．発行年 2019年
3．雑誌名 語り合う文学教育	6．最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 難波博孝	4．巻 67(8)
2．論文標題 「新しい実在論」と第三項理論	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 18-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 田中実	4．巻 126
2．論文標題 〈近代小説〉の読みの革命　―漱石『夢十夜』「第一夜」を例に―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 世界文学	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中実	4．巻 66-8
2．論文標題 〈第三項〉と〈語り〉／〈近代小説〉を〈読む〉ととは何か　―『舞姫』から『うたかたの記』へ―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 2-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 難波 博孝	4．巻 15
2．論文標題 現在進行中の日本の教育改革について ： 特に国語科教育に注目して	5．発行年 2017年
3．雑誌名 国語教育思想研究	6．最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 齋藤知也	4．巻 52-540
2．論文標題 第三項理論から単元問題を問う―評論「真実の百面相」（大森荘蔵）における世界観認識をめぐって―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 月刊国語教育研究	6．最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 齋藤知也	4．巻 22
2．論文標題 国語教育の制度性を問い、〈言葉の教育〉というアイデンティティの構築へ―〈言語以前〉の問題との対峙から	5．発行年 2018年
3．雑誌名 山梨大学国語・国文と国語教育	6．最初と最後の頁 55-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村龍一	4．巻 44
2．論文標題 新しい学習指導要領とどう向き合うか―あまんきみこと「白ぼうしの〈読み方〉―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日文協 国語教育	6．最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村龍一	4．巻 64-3
2．論文標題 芥川龍之介『羅生門』の〈読み方〉	5．発行年 2018年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 27-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山中正樹	4．巻 44
2．論文標題 「熊の神様」を信じることの意味をめぐって ―川上弘美「神様」私論―	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日文協 国語教育	6．最初と最後の頁 83-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中実	4．巻 65(8)
2．論文標題 〈自己倒壊〉と〈主体〉の再構築　―『美神』・「第一夜」・『高瀬舟』の多次元世界と『羅生門』のこと―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 2-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中実	4．巻 84
2．論文標題 現実は言葉で出来ているⅡ　―『夢十夜』「第一夜」の深層批評―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 都留文科大学研究紀要	6．最初と最後の頁 31-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 難波博孝	4．巻 65(3)
2．論文標題 第三項理論に拠る教育・授業 ： 合言葉はF 続き	5．発行年 2016年
3．雑誌名 日本文学	6．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 難波博孝	4．巻 12
2．論文標題 未来の国語教育の方向性	5．発行年 2016年
3．雑誌名 国語教育思想研究	6．最初と最後の頁 11-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村龍一	4．巻 20
2．論文標題 クライアントにはどうしてもあなたに聴いてほしいことがある ―あまんきみこ「白いぼうし」の〈読み方〉	5．発行年 2016年
3．雑誌名 松蔭大学紀要	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中村龍一	4．巻 14
2．論文標題 【授業実践：語り論の〈読み方〉】　語り手、クライアントはあなたに聴いて欲しいことがある	5．発行年 2016年
3．雑誌名 語り合う文学教育の会	6．最初と最後の頁 17-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計23件（うち招待講演　15件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 田中実
2．発表標題 村上春樹『猫を棄てる』の語るものー「一滴の雨水の責務」を「地下二階」で引き継ぐー
3．学会等名 新しい時代における日本言語文学研究フォーラム（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 田中 実　(他登壇者 須貝千里、コーディネーター 難波博孝)
2．発表標題 第三項理論から国語教育を問い直して　ー「新しい実在論」から教育の変革を展望するー
3．学会等名 全国大学国語教育学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 中村龍一
2．発表標題 心を問う「第三項 語り論」の〈読み方〉―　いのちの文学教育　―
3．学会等名 日本教授学習心理学会　第14回年会
4．発表年 2018年

１．発表者名 田中実
２．発表標題 〈近代小説〉の〈読み〉の革命
３．学会等名 アジア・アフリカ研究の視野における日本学国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 田中実
２．発表標題 〈近代小説〉の読み方―魯迅の『故郷』を例に―
３．学会等名 杭州師範大学
４．発表年 2018年

１．発表者名 山中正樹
２．発表標題 異文化理解のための〈文学教育〉を利用した日本語教育について
３．学会等名 ２０１８年日本語教育とシラバスデザイン国際シンポジウム（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山中正樹
２．発表標題 川端康成文学の特徴をめぐって――ノーベル文学賞受賞と「雪国」を中心に――
３．学会等名 吉林大学公共外国語教育学院　学術講座（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 山中正樹
２．発表標題 世界文学としての日本文学をめぐって――川端康成文学の特徴を題材に――
３．学会等名 南京師範大学外国語学院　学術講座（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山中正樹
２．発表標題 近代日本文学研究の現在――　研究方法をめぐって／川端康成「雪国」の解釈　――
３．学会等名 湖南師範大学外国語学院　学術講座（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山中正樹
２．発表標題 日本文化における中国文化の影響　――川端康成のノーベル賞受賞講演「美しい日本の私」を題材に
３．学会等名 吉林外国語大学東方言語学院　学術講座（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山中正樹
２．発表標題 近代日本文学の基層的特徴をめぐって――日本人の〈自我〉意識の特徴について――
３．学会等名 吉林大学公共外国語教育学院　学術講座（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 田中 実　 須貝 千里　 齋藤 知也 中村 龍一
２．発表標題 高等学校文学教育のこれから －文学研究に基づいた文学教育－
３．学会等名 全国大学国語教育学会　第133回福山大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 難波博孝
２．発表標題 現在進行式的日本教育改革－以中等教育為例－
３．学会等名 中學國語文師資培育與教學實務國際交流論壇　台湾師範大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 難波博孝
２．発表標題 現在進行式的日本教育改革－著重國語教育方面－
３．学会等名 儒學與語文學術研討會　台北市立大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 田中実
２．発表標題 近代小説とは何か　～鴎外『舞姫』・『うたかたの記』から村上春樹『騎士団長殺し
３．学会等名 沖縄の教育・伝統芸能文化・文学を考える「Kuuの会」第１０回　学習会テーマ：シマ言葉と教育を考える
４．発表年 2017年

１．発表者名 山中正樹
２．発表標題 「神様」から「神様２０１１」へ ―川上弘美「神様２０１１」の教材価値をめぐって―
３．学会等名 第69回日本文学協会国語教育部会夏期研究集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 田中実
２．発表標題 『高瀬舟』と『羅生門』の多次元世界
３．学会等名 語り合う文学教育の会・合宿研究会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 田中実
２．発表標題 〈近代小説〉の読み方を拓く
３．学会等名 科学的『読み』の授業研究会新潟サークル（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 田中実
２．発表標題 魯迅の『故郷』と村上春樹の『風の歌を聴け』
３．学会等名 北京日本文化周　日本当代陶芸展―職人精神とは何か(北京日本大使館主催)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 田中実
２．発表標題 〈近代小説〉の誕生　―鴎外の『舞姫』と漱石の『心』
３．学会等名 上海外国語大学日本文化経済学院　高潔研究室 主催（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 田中実
２．発表標題 〈近代小説〉とは何か　―鴎外の『舞姫』と村上春樹の『風の歌を聴け』
３．学会等名 大連外国語大学日本語学院　孟海霞研究室主催（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 田中実
２．発表標題 近代日本小説における漱石　―『夢十夜』を中心に
３．学会等名 世界文学会（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 中村龍一
２．発表標題 〈読み〉の世界像を転換する　―自己変容から自己倒壊へ―
３．学会等名 全国大学国語教育学会　第130回新潟大会
４．発表年 2016年

〔図書〕　計3件

1．著者名 難波 博孝，山元 隆春，谷 栄次，広島大学附属東雲小中学校国語科	4．発行年 2019年
2．出版社 明治図書	5．総ページ数 176
3．書名 詩とイマジネーションの教育　理論と実践	

1．著者名 田中実・須貝千里・難波博孝	4．発行年 2018年
2．出版社 明治図書出版	5．総ページ数 286
3．書名 第三項理論が拓く文学研究/文学教育 ： 21世紀に生きる読者を育てる	

1．著者名 難波博孝	4．発行年 2017年
2．出版社 明治図書出版	5．総ページ数 128
3．書名 ナンバ先生のやさしくわかる論理の授業 ―国語科で論理力を育てる―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	難波　博孝 (NANBA Hirotaka) (30244536)	広島大学・教育学研究科・教授 (15401)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田中　実 (TANAKA Minoru) (40137055)	都留文科大学・文学部・名誉教授 (23501)	
研究分担者	中村　龍一 (NAKAMURA Ryuichi) (10750268)	松蔭大学・公私立大学の部局等・教授 (32719)	
研究分担者	齋藤　知也 (SAITO Tomoya) (70781110)	山梨大学・綜合研究部・准教授 (13501)	